

トサエ麗華

景点「島嶼」

(学芸)樹玉藤へー

東京大学大学院人文社会系研究科

多分野交流プロジェクト 研究ニューズレター

2016年 2月 18日

Vol. 76

目次

巻頭エッセイ

「福島」点景... 一ノ瀬正樹

プロジェクト案内

東京大学草創期の授業再現2... 葛西康德

リズムの諸問題3 リズムと科学... 鈴木泉

編集後記

一ノ瀬正樹

巻頭エッセイ

「福島」点景

一ノ瀬正樹(哲学)

平成 27 年 12 月 19 日と 20 日、福島に出張してきた。震災後、福島に向くのは、これで七回目か八回目である。震災の年の 7 月に、島菌進氏と中川恵一氏に、福島原発事故に関して「哲学が何か言うべき問題だ」と諭され、緊急シンポジウムを開催して以降、つかず離れずという感覚で、福島の問題に向きあってきた。いわば外因的な動機による研究だが、振り返ってみれば、内在的な要因も自身の中にあったことをいまさらながら自覚する。私の父は福島県いわき市の出身である。私が子どもの頃、父に連れられて福島の祖母を毎年訪れていた。そして、海水浴をしたり、お墓参りをしたり。祖母の、しわしわになった手の感触をいまでも思い出す。祖母は、そして叔父は、私の先祖がその昔、会津若松からいわきに移住してきたことを教えてくれた。たぶん、会津藩士の流れなのだと思う。子ども心に、福島、会津、という地名が深く刻まれ、その後歴史を学び、会津戦争や白虎隊の逸話を知り、それらの事情は、おのずと私のアイデンティティーのなかへと溶融していった。そうしたなか、あの、東日本大震災と、福島第一原子力発電所の事故である。原発事故の映像を見るたび、心が揺れ、気分が落ち込み、涙が出てきた。平成 23 年 4 月になると、原発事故による放射能漏れに対する極度の警戒感が全国に広がり、いまから思うと、

全国が、とりわけ近隣地域は、疑似パニック状態になっていたのだと感じられる。放射能が伝染するとか、東北の薪を燃やすと放射能がばらまかれるとか、数年後には関東も含めて何万人もの人が死ぬとか、おどろおどろしい風聞が跋扈した。研究者の中にも、そうした風潮に流されたのか、利用しようとしたのか、不安を一層助長するような発言をする方々も多く現れ、人々に注目された。

私自身も、福島の縁者であると同時に、茨城県に居住し直接の被災をした身として、心がちに乱れた。とりわけ、福島への思いは強かった。一体どうなってしまうのか。戊辰の時にあれほど痛めつけられ、そしてまた、これなのか！ 私は、残念ながら、放射線についてはまったくの素人である。平成 11 年 9 月の茨城県東海村の JCO 臨界事故にも身近に接していたにもかかわらず、放射線についてはぼやっとした理解しか持てていなかった。まったく迂闊なことである。勉強を始めた。そして、大まかに、今回の原発事故の様相に対して自分なりの理解ができつつあった。第一原発直近の地域以外に居住する限り、大人であれ子どもであれ、外部・内部被曝の両方とも、急性障害を起こすような量ではなく、晩発性がん死の懸念もあまりなく、ほとんど健康影響が出ない被曝線量であることが 2011 年の段階でほぼ予想されつつあった。しかし、

人々の受け止め方に関して、深刻な問題性が出現していたし、実際の被害も、放射線障害とは別のところで、拡大傾向にあった。ちょうどそのときの、島菌氏と中川氏の誘いだったのである。

その後、放射線被曝についての著書も出し、この問題にコミットしてきた。詳しくは振り返る紙幅もないが、私自身の研究活動のなかで、この問題を論じるにあたって絶対に必要な二点をまずは注記したい。第一に、福島県には現在多くの方々が居住し続け、日常生活を送っているという事実を、ぜひ確固として頭に叩き込んでいただきたい。第二に、そうした事実の様相をぜひ福島の現地に赴き、実体験していただきたい。放射能汚染にまみれて、人々が放射線障害で苦しみ、鼻血を出したり、出産をあきらめたり、子どもが外遊びができなかったりする、空想の中の「フクシマ」は、どこにも存在していない。福島県は一つの県として普通に存在し、観光業やその他の産業も震災からの復興を遂げつつあるし、出生率は増加傾向で全国平均をいまや上回っており（2015年6月6日『日本経済新聞』、<http://www.nikkei.com/article/DGXLZ087758140V00C15A6L01000/>）、事故直後肥満傾向の見られた子どもたちの肥満率も震災前の水準に戻っている（2016年1月23日『読売新聞』35面）。実際、放射線被曝量は、2011年に予

想された通り、ほとんどの方々が年間積算で外部被曝1ミリシーベルト程度であり、健康に影響が出ることはほぼないことが分かってきたし、内部被曝に関しては、ホールボディカウンターによる繰り返しの測定で、2015年の段階ではほぼゼロであることが分かっている。拙論「いのちは大切」、そして「いのちは切なし」（東京大学哲学研究室『論集』33号、2015年3月）を参照されたい。

むろん、原発事故そのものは大変悲惨なものであり、原発事故自体の収束は途上である。この点について、電力会社、政府などの関係機関の責任は等閑に付すことはできない。振り返ってみるならば、電源の確保、避難訓練の実施などの面で、事故を避ける手立ては十分にあったからである。けれども、そのことと、現在発生しつつある被害、すなわち、震災関連死の増加をはじめとする被災者の呻吟についての対応は、別立てである。原発憎し、放射線憎しで、「潜在的なリスクであれ、不安に思うのは当然だ」、などといった感情的な発言をする方々は、そうした発言が現に福島に居住している方々にどう響くか、よくよく考えてみるべきである。福島の方々は、放射線について学び、避難か留まるか自分の真摯な判断で意思決定して、いまを生きているのである。リスクというのはつねに存在し、一つのリスクを避ける行為が別のリスクを発生さ

せるという、トレードオフの関係になっている。避難することにも、健康面、経済面、教育面などでリスクが厳然と存在するのである。それを、外部の人が、データにも立脚せず、福島の現状をとくと理解もせず、放射線被曝のリスクだけを強調して不安を助長するような発言をするのは道徳的に許容できない。原発事故を将来にわたって防ぎたいという善意なのかもしれないが、「地獄への道は善意で敷き詰められている」という格言を想起したい。善意は、ときとして重大な被害の原因になってしまいうるのである。

しかしさすがに、事故後5年近くが経過して、人々も研究者もやや冷静に事態を検討する雰囲気が醸成されてきた。今回の福島出張は、私が研究代表者を務める科研費基盤B「被害・リスク・合理性をめぐる記述性／規範性の交差を通じた災害復興のための哲学構築」の活動の一環として、そうした現状を確認することが目的であった。鈴木泉准教授と景山洋平氏と、三人で福島を訪れた。まずは、12月19日に福島市の「コラッセふくしま」にて開催された、本学の佐倉統教授主催のシンポジウム「放射能」はなぜ嫌われるのか」に参加した。いわば恐怖のアイコンとして機能してしまっている「放射能」について、心理学者と地域の方々との対話を主としたシンポジウムである。牛乳生産者などのリアリティあふ

れる苦勞を知り、大いに啓蒙された。質疑に際して、私は、日常生活での他のリスク、たとえば胸部X線写真を撮るとか、喫煙するとか、飛行機に乗るとかと、原発事故による放射線被曝とを相対的に比較することが、なぜしにくいのか、それができれば相場観を持って冷静に対応できるのではないのか、と質問した。花崗岩建築物である国会議事堂周りの自然放射線による時間当たりの線量が0.29マイクロシーベルトであり、福島市の空間線量より高いという情報も盛り込んで質問をしたのである。明確な応答は得られなかったが、どうも、原発事故による被曝と、その他の被曝やリスクは別物と捉えられているという現状がうっすらと伝わってきた。これは善し悪しの問題ではないが、結果的には損をしてしまう可能性があるのではなかろうかと、そのとき感じた。しかし、こうした事態の要因は複層的である。息の長い検討を要するだろう。

翌12月20日、私たち三人は、福島市でレンタカーを借り、まずは飯舘村に向かった。飯舘村役場にて、以前私が福島に出向いたときに知り合った、「ふくしま再生の会」の菅野宗夫氏と落ち合い、飯舘のおもなスポットを案内していただいた。飯舘村役場でのモニタリングポストでの空間線量は時間当たり0.37マイクロシーベルトであった。私は簡易線量計付きのスマートフォンを持っているので、

東京大学草創期の授業再現②

案内していただいた所々を計測してみた。小学校の校庭が最も高く、時間当たり 0.84 マイクロシーベルトであった。飯舘村はあちこちに汚染土を入れたフレコンが点在していて、線量はぎりぎり居住可能だとしても、気持ち的な次元で、生活再建を図るにはもう少し時間が掛かりそうだという実感を得た。しかし、それ以前に訪れたときと比べると、何か光が差しているようにも感じられた。もう少しだ。途中、とある農地で、農地の土壌での放射線検査をしている、本学農学部溝口勝教授と偶然邂逅した。東京大学の研究者がこうした地道かつ着実な復興支援を行っていることに、頭が下がる思いがしたものである。

飯舘村視察中に菅野氏から伺った話の中で、西日本の女子大生が飯舘村訪問の企画に参加しようとしたところ、出発の日に親から行くのを止めるよう懇願されて中止した、という逸話が心に残った。いまなお、そうした理解が残存しているのか、と嘆息したものである。現時点で、飯舘に 2 日滞在したところで、かりに時間当たり 0.4 マイクロシーベルトの空間線量を実効線量として被曝したと仮定しても(実際は実効線量はもっとずっと低い)、被曝線量の総計は 19.2 マイクロシーベルトである。胸部 X 線が瞬時に実効線量で 60 マイクロシーベルト被曝するのと比較して、非常に低い。飯舘での 2 日滞在で健康影響が出るのな

ら、健康診断をした児童はその三倍以上の健康影響が出なければ論理的におかしい。この辺り、考えどころである。

その後、南相馬市立総合病院に向かうべく、飯舘を後にした。道の途中、野生の猿が道路を横断する場面に遭遇した。まことに、福島は自然が一杯である。南相馬総合病院にて、外科医の尾崎章彦医師と脳外科医の嶋田裕記医師に面会し、お話を伺った。現時点で、放射線による直接の健康影響はまず確認されないこと、しかし、健康影響がないという話しに納得しない方々も一部おられることなど、貴重なお話を伺った。納得しない方々の根底には、健康影響がないということになってしまふと、補償金を受け取れなくなってしまうのではないか、という経済的な懸念がある、という指摘は、私たちにとって新しい見方だった。なるほど、人間本性からして、そういう発想も当然あるだろうと理解したのであった。

南相馬総合病院を後にして、私たちは国道六号線をいわきまで南下した。途中、いうまでもなく、福島第一原子力発電所を直に左に臨むこととなった。工事用の巨大なクレーンの入った建屋を目にしたとき(私は 2013 年 8 月に福島第一原発視察のため原発敷地内に入っているため事故後二度目のことだが)、一瞬身震いがしたものである。線量は、車の中で、

編集後記

2015 年度の多分野交流演習も、例年に変わらず、大きな成果を挙げ、終了を迎えました。これも、演習を主催された先生方、そしてご協力いただいた人文社会系研究科の皆さんや提題者、そして出席者の皆さんのおかげです。本当にありがとうございました。

多分野交流演習は、文字通り「多分野」ですから、特定のディシプリンを越えて、多様な視点から一つのテーマをめぐって行われる演習科目です。今年度は、葛西先生による演習で、東京大学草創期の講義がいろいろな角度から再現されるという、興味深い試みが行われました。これは、21 世紀の「現在」に学問をしている私たちに対して、「過去」の視点をぶつけてみるという、通時的な多分野の実践だと思われます。それに対して、もう一つの鈴木先生の演習は、現代の文脈にたった上で、「人文的」なりズム論に対して、「生物学」の視点をぶつけてみるという演習で、いわば共時的な多分野の実践であると位置づけられましょう。古典と先端、文系と理系、といった交差が一定程度実現され、多分野交流演習の内容が充実したことを喜びたいと存じます。

多分野交流演習に関わっていると、異なる分野同士の違いに驚くことがあると同時に、逆に共通する認識が多くあることにもびっくりすることがあります。こうした気づきを通じて、古典偏愛と先端好き、文系的質的研究と理系的量的研究、といった不毛な対立を止揚していくことが十分に可能だと実感します。たとえば、文系視点からたまに、evidence-based な理系的発想に対する忌避感が表明されることがあります。そうした発想に基づく自然科学こそが、環境破壊や人格操作などの元凶なのだとする、素朴な反発でしょうか。しかし、冷静に考えてみれば、文献による裏付けや正当化を論文に要請するといった意味で、人文的研究もまた evidence-based な発想をすでに導入しています。内包的違いこそあれ、外延的には同様な学問構造です。多分野交流を通じて、こうした広い意味での共通性を互いに共有し、不毛な対立やコントラストを越えて、生産的な学術協同に進んでいけることを、心から期待しています。今後とも引き続き、よろしくお願いいたします。

一ノ瀬正樹（多分野交流プロジェクト研究担当委員）



第 76 号

東京大学大学院人文社会系研究科

ワーキンググループ事務局発行

責任者 一ノ瀬正樹

連絡先 情報メディア室

TEL: 03-5841-3880

FAX: 03-5841-8949

Edited by

Kaori Domae

Yoshiki Nishikawa

BIT-DESIGN